

「世界水フォーラム」と子どもたち

設楽 京子



降のフォローアップに「第三回世界子ども水フォーラムに参加して」と題して次のような寄稿を頂いた。

僕が初めて「世界子ども水フォーラム」という言葉

「洗濯をし、身体を洗い、時には排せつもする湖や川などの、安全ではない水を直接飲んでいきます」(マラウイ)。「安全な水が得られないため、汚れた水を我慢して飲んでいきます」(エチオピア)。「毎日の飲み水や食事の支度をするための安全な水を得るために、女性や子どもたちが、毎回数時間かけて水汲みにいきます」(シエラレオネ)。「水くみをしなければならぬので、学校へ行く時間がありません。登校できる子どもが減少しているため、閉校する学校もでていきます」(マラウイ)。「十分な飲料水はありませんが、今こそ水との付き合い方を変えなければ、将来、水不足は起きます。水に対する人々の意識を高めることが大切です。」(ドイツ)。

第三回世界水フォーラムの中の「世界子ども水フォーラム」は、三十八の主要テーマから組織された三百五十一分科会の一つとして、去る三月に京都市などで開催された。耳を疑いたくなるような発展途上国の窮状をはじめ、先進国の子どものための「地球の水危機」を示唆したもので世界の水事情は重大で、多様であった。

中でも、水道の蛇口をひねれば、安全な水が簡単に得られる日本や先進国の子どもたち

にとって、途上国の水をめぐる諸問題は信じ難い、大きなカルチャーショックだった。と同時に、水環境健全化の意識が高い日本の子どもたちも、世界の水問題の原点である、「命の水、安全な水」の確保のための議論に参加しながら、一滴の水の重要性を改めて再確認したようである。その議論の結集が、「子ども水宣言」である。この宣言文は、参加三十二カ国の子どもたちが、文化や言語、習慣の違いをこえて、百九人全員で作成した。

宣言は、愛と平和と調和の名のもとに、「子ども、水、衛生、衛生習慣に関する事業」について、政策決定者の支持と子どもへの参加、保護、生存、発達の確保をうたっている。水に関する多様な状況と認識の中で、当初は議論がかみ合わなかった子どもたちも、六日間の交流と議論の中で、次第に互いを認め合い、相互理解のもとに高らかに宣言がなされたことは、第三回世界水フォーラムの一つの大きな成果ではないだろうか。地球人口の三割は子どもたちである。未来を見据えた新たな巨大な力を感じる。

昨夏、開催した同フォーラムブレイベント「全国子ども水会議イン最上川」と第三回世界子ども水フォーラムに参加した、広田岳土さん(横浜市、中学二年生)からフォーラム以

を聞いたのは、去年、酒田市で開催された「全国子ども水会議イン最上川」の時だった。国際フォーラムと聞いて、是非参加したくなった。数カ月後、参加者募集を知り、普段、タマちゃんが出来た帷子川で行なっている活動をまとめて提出し、見事日本代表の一人に選ばれた。

三月十八日、開催地の京都に入った。翌十九日清水寺に行った。そこでは世界各国の子どもたちと三種類の水を桶で楽しんだ。二十日、二十一日は、滋賀県の大津プリンスホテルで水問題をテーマに分科会が始まった。

分科会では、参加者が四つのテーマに分かれて議論。僕は「水の多様な使い方 自然、遊び、文化」のテーマに参加した。外国の子どもたちが十五人、日本代表が十人ほどいた。議論の結果、世界の川は水がとて汚れているという話が多く出たが、結局水に関連した神話やおとぎ話、宗教的な物語が中心になった。この分科会に参加した世界の人たちは、日本側とは、あまり話しかみ合わなかった。でも、世界の水事情が分かりとてもいい勉強になった。今、僕たちは、日本の水に関するネットワークを作ろうとしています。

「ナイスさかた」編集長、酒田市)